

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

内蒙古自治区（南モンゴル）におけるオボの資源化：
加速する観光化の動きの中における反／非観光化の
動き

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤井, 真湖 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008637

内蒙古自治区（南モンゴル）におけるオボの資源化 —— 加速する観光化の動きの中における反／非観光化の動き

藤井 真湖
愛知淑徳大学

はじめに

オボとは山の頂や草原に立てられた石を堆積した聖所で、モンゴル族の信仰の対象となってきたものである¹⁾。オボは、モンゴルの山頂、峠、湖や泉の岸辺、大きな道のそば、広大な平野に存在している。ただし、ひとくちにオボとはいっても、祭祀されているオボとそうではないオボがある²⁾。オボそのものの歴史的起源については、現在のところ定説はない。シャーマニズム起源の説明が数のうえでは多いように思われるが、現在のような体系的な祭祀がおこなわれるようになったのは、モンゴルに第二次仏教ブームが伝来した16世紀後半-17世紀以降の比較的新しいものだとする説もある³⁾。いずれにしても、オボの起源を論じるさいには、オボが最初にどのような目的でつくられたのかということを考慮に入れなければならないだろう。筆者の現時点で聞き取りをした限りにおいては、現在のオボ祭祀の目的は降雨を祈願することである。

2015年8月筆者は、モンゴル族におけるオボの資源化の一端をさぐるため、内蒙古大学のS教授の協力のもと、内蒙古（南モンゴル）における幾つかのオボを視察することができた⁴⁾。日本におけるオボ研究は戦前からあり⁵⁾、文化大革命期には途切れているものの、改革解放後に幾つかの現地報告もなされている。2000年以降の傾向はモンゴル族人類学者によるオボ関連論文が蓄積されてきていることである⁶⁾。すでにオボは2006年に国家級無形文化財のリスト入りをしているところからみて [Urtunasutu 2012: 664]、資源化（とくにその観光化という資源化の動き）は加速していることが推測される。国家によるオボの資源化は「少数民族」地域での観光政策が色濃く絡んでいることは論を俟たないが、最近の傾向は、資源化の動きが行政や企業のみならず、学術界も大々的に巻き込んだ取り組みになっていることである。

たとえば、2015年8月に筆者が内蒙古社会科学院におけるオボ研究者N氏（モンゴル族）に聞いたところによれば、前年に1班3-4人で構成される10班の調査班がフィールド調査を行い内モンゴルすべてのオボの登録をおこなったということ、そして粗細はあるものの調査書はすでに出来上がっているという情報を得た。これを公的に裏付けるように、内蒙古社会科学院から発行されている蒙古語版の2016年度の第2期——一年に6回

発行される—における裏表紙内側に西ウジュムチンにあるオボの写真一枚と共に、社会科学院の研究チームが総ての12盟・市の範囲でオボの登録をして3,747基のオボがあるということを明らかにしたとある。こうしたオボの登録がなされたのは初めてのことでありとも記されている。そして、オボの特徴に基づいて、①古いオボ、②影響力のあるオボ、③特徴のあるオボ、④伝説のあるオボ、そしてまた、⑤大規模に、且つ、大勢が祀ること、を著名なオボであることの基準として、研究者たちの審査を経て70のオボを内モンゴルの著名なオボに確定したとある (Sarana 2016: 裏内表紙、ただし①から⑤の番号は筆者による)。HPによると、72基—社会科学院の記事よりも2つ多い—のオボが登録されたことを祝う式典が、2016年6月17日にオルドス市ウーシン旗嘎魯図鎮の中国蒙古族オボ文化博物館で行われたとある。当該式典には藝術楽団が参加して盛大に行われた模様で、舞台上にオボがしつらえられ、そこにクリスマスのごときイリュミネーションを施した写真もHPに掲載されている(写真1)。当該記事には、筆者が得た情報を裏付けるように、2014年に内蒙古社会科学院が中国蒙古学会の委託のもとに課題研究班を組織し、全区1盟市の62旗县区におけるオボ文化の調査をおこなった結果3,747のオボ情報を得て、班の専門家たちが審議をおこない、オボの歴史的知名度と現代的影響力に基づいて72基の“知名敖包”を選抜し、オボ名が地域ごとに列挙されている⁷⁾。

HP記事では、呼和浩特市の玉泉区にある呼和敖包(フフ・オボ)もその72基の“知名敖包”名簿の中に入ったことが特筆されている。この呼和敖包には筆者も内蒙古大学のオボ研究者のU氏(モンゴル族)に案内されて視察したが、氏の意図としてはこのオボがいわゆる伝統的に祭祀されているオボではなく、現代的な観光用のオボとして筆者の研究資料の一助になるだろうという趣旨から案内されたのであった(写真2)⁸⁾。同HPではオボの確定作業には研究者が関わったとあり学術性が強調されているものの、たとえば呼和敖包のような新しい観光用オボが著名なオボに入ったことを見ると⁹⁾、観光を意識して選別されているものが含まれている。内蒙古社会科学院におけるモンゴル語の記事における基準は明確とはいえないが、漢語のHPに記載されている基準をみても、い



写真1 2016年6月のオルドスにおける式典の一部 (<http://www.newsqq.com/tsyq/2016/7124.html>, 2016年12月30日閲覧)。



写真2 呼和浩特市の呼和敖包(2015年8月、筆者撮影)。

わゆる「伝統的な」オボと観光用に適合しているオボの二つの路線で“知名敖包”を確定しようとしたことがうかがわれる。折衷的な二路線でのオボ選定となっているため、モンゴル文化に全く不案内な人間にはオボ文化は一樣なるものとして映るであろう。いずれの路線にしても、以上のようなオボの登録は、民俗文化の資源化という面で重要な意味を伴うことは疑いない。

1 筆者の視察したオボについて

1.1 2015年度のフィールド調査の概要

文化大革命（1966-1976）後、とりわけ2000年代以降に内蒙古自治区においてはオボそのものが復元や新設されることが各地で見られるようになってきた¹⁰⁾。内モンゴルにおいてオボの復活がどの程度なされたかについては、少なくとも2000年代初期においては地域差もあったようである¹¹⁾。筆者のオボ調査は、省都フフホト市の近郊地と中央部でおこなったものとなる。フィールド調査では協力者となってくれたS教授—氏はオボ研究者ではない—のおかげで、現代のオボの状況をいくつか視察することができた。S教授の知り合いの地元行政機関に勤めるモンゴル族エリートや旅行社の紹介で調査をおこない、初歩的な聞き取りをすることができた。

調査としては、シラムレンの観光地にあるホンゴル・オボの視察、当該オボの近くにある普会寺のチベット仏教僧や地元住民からの簡単な聞き取り（以上は2015年8月6日-7日）、そして、シリングル地方ではシリンホト市内の貝子廟の後方にあるエルデニ・オボの視察、シリンホト市の観光業者の二人のモンゴル族—からの聞き取り、貝子廟での老僧から簡単な聞き取り、シリングル盟アバガ旗における牧民の観光ゲルに泊まったときの様子、その観光ゲル近くの楊都廟の近くにある楊都オボの視察、シリングル盟正鑲白旗の“旗オボ”、“白いスルデのオボ”の視察である（以上は2015年8月11日-14日）。オボとしては、計5つのオボを視察したことになるが、本稿においては、このうち、1）ホンゴル・オボ、2）エルデニ・オボ、そして3）楊都オボの3つを記述することにした。

1.2 先行研究と本稿の目的

オボの資源化に関して、とくに観光化という資源化については、文革後いち早くオボ祭祀に参加してその記録を残した大塚和義氏の論考では、中国政府がオボの復活のさいに観光化を念頭においていたと言及されている（大塚 1984: 22）¹²⁾。氏のオボ祭祀の報告には、女性が祭祀に参加していたり、女性が馬に乗っていたりする写真が掲載されており、復活されたとはいえ、そこにおいては「伝統的な」オボ祭祀において一般的にみとめられる女人禁制が文革後において破られていることが窺える¹³⁾。これらの写真は

「伝統」との対比という観点から撮影されたわけではないので、一層その記録の価値は高いと言わなければならない。重要なことは、こうした「伝統からの逸脱」からみて、オボ祭祀の復活がそれほどスムーズになされたわけではないことである。実際、オボ研究者のオルトナスト氏は、文革後にオボは、①元の場所に復活させたもの、②場所を変えて復活させたもの、そして③新設したもの、という3つのタイプがあることを報告しているが [Urtunasutu 2012: 680-696]、①元の場所に復活させたもの、でさえ、オボの形状は装飾的なものになっており、元のオボとはかなり異なるものになっていると指摘している [Urtunasutu 2012: 680]¹⁴⁾。

本稿で対象にするオボの観光化という現象は、これまでの先行研究のなかでは、観光学とオボ研究とにまたがっている領域であるといえる。ただし、前者の観光学分野では、オボは観光資源の項目のひとつにしかすぎないという位置づけが多いようであり、オボ観光に特化したものは未見である。後者のオボ研究は、前述のように、文化人類学の、とくにモンゴル族の人類学者が知見を蓄積してきたといえる。こうしたモンゴル族人類学者の論考のなかでも本稿の資源化というテーマとかなり重複しているのは達古拉氏の博士論文(2014年)である。当該論文は、近年復活している内モンゴルにおける“旗オボ”と呼ばれる行政オボ、すなわち清朝時代の旗制度において行政が主体となって祭祀活動をおこなっていたオボを対象に、清朝末期、民国期、共和国期、文革以降期という時系列で“旗オボ”の祭祀状況を述べたものである。とくに文化大革命後の2000年代以降の“旗オボ”の復活・創成について、自らウランチャブ地方のドゥルベト旗、チャハル前旗、チャハル中旗、チャハル後期、そしてシリングル地方のアバガ旗におけるフィールド調査をもとに論じた第5章は非常に示唆に富むフィールド調査記録になっている。氏は近年の行政オボ祭祀においては「観賞祭礼」と「宗教祭儀」の二分化という新たな展開が見られるという重要な指摘をしている [達古拉 2014: 72]。本稿では、この概念を、「観光化」と「反／非観光化」という語にいわば置き換えて、筆者が視察したオボを記述するさいに用いることにしたい。「反／非観光化」というのは日本語としてこなれない表現ではあるが、「反観光化」とは“観光化に逆らおうとする動き”、「非観光化」とは“観光とは関係のない状態におかれていること”をそれぞれ指すことにする。

オボ研究におけるいわば盲点は、モンゴル文化においては、オボだけでなく、泉や湖もまたオボ同様の祭祀対象となっているが、オボに焦点が当てられているために、考察の対象から漏れていることである。また、オボ研究においては観光化も取り上げられているが、オボの置かれている観光地の状況にはあまり触れられていないことが多いと思われる¹⁵⁾。本稿では、このオボの置かれている観光地の状況も記述に取り入れることにしたい。すなわち、以下においては、1) オボとそれに準じる泉などを含めたオボ状況、2) 「観光化」と同時に「反／非観光化」という2つの視点を取り入れながら素描したい。

2 内蒙古自治区包頭市達茂明安聯合旗希拉穆仁鎮で視察したオボ

2.1 呼和浩特近郊のシラムレン（希拉穆仁）観光地におけるホンゴル・オボ

ホンゴル・オボは、呼和浩特から乗用車で約2時間の近郊にあるシラムレンの観光地にある（写真3，4）。呼和浩特から約90キロの北北西方向に位置している。シラムレン地方にモンゴル族が居住するようになったのは、清朝が17世紀末に大青山北麓のシラムレン河一帯に哨所を置いたときに遡る。当時は、いわば辺境軍事基地であったのが¹⁶⁾、1751年にセツェン・ハン旗（現在はモンゴル国に属す）の親王の子息がフフホトにあるシレート召（延寿寺）の第六世ホトクト・ゲゲーン（法名：アグワンロブサンダワ）として認定されたことによって大きな変化を迎えた。なぜなら、この人物は北京の乾隆帝への謁見をへてジャサク・ダー・ラマという宗教的権威を与えられ、乾隆帝からシラムレン一帯を与えられたからである。1769年、第六世ホトクトはこの地に一座の寺廟を建立し、普会寺という名を乾隆帝から与えられた。

この寺はそれゆえにジャサク・ダー・ラマの避暑地であり、シラムレン一帯の牧民はいわば当該寺の俗徒となった。そして、最終的にジャサク・ダー・ラマには軍事的な権限も与えられ政教一致の体制が敷かれることになった [徐・孟克徳力格尔 2012: 195-196; 喬吉（編）1994: 83-84]。民国期においては、1940年に日本の蒙疆政府がシラムレ



写真3 ホンゴル・オボの入り口（2015年8月，筆者撮影）。



写真4 ホンゴル・オボ（2015年8月，筆者撮影）。



写真5 第六世ゲゲーンの像が復元されてから同様に生き返った境内のご神木（2015年8月，筆者撮影）。



写真6 普会寺門前における整備の様子（2015年8月，筆者撮影）。

ンを旗として独立させ、シレート旗と命名し、行政上はウランチャブ盟に属させた。そのさいには、普会寺のダー・ラマであるサムトゥンレンを旗長とした（ただし宗教体制上は帰化城シレート廟に属していた）。1945年の日本の敗戦により、シレート旗の行政区画は廃止され、綏遠省トゥメト旗の管轄に入った。共産党時代に入った1949年にはトゥメト旗の第七区となり、1954年にウランチャブ盟の達茂明安聯合旗に組み込まれた（徐・孟克徳力格爾 2012: 197）。その後、包頭市に編入され、現在は包頭市の達茂明安聯合旗に属している。寺の僧によると、ハルハから来た第六世ホトクトの遺骸は文革時代に骨まで持ち去られたが、現在は、金メッキされた第六ホトクト像が修繕されて以降、文革時代に枯れてしまっていた境内の木が蘇生したという（写真5）。第六世ホトクトは現在においても静かな影響力を持っているように感じられる。現在、シラムレンは、ゲゲンタラと並ぶ、内蒙古で最も古い一大観光地となっているが¹⁷⁾、以上のように、シラムレンは、フフホトのシレート・ジョーの避暑地的性格をもっていたので、この地域が内モンゴルにおける現代的な観光の発祥の地となったことは不思議ではない。筆者がシラムレンに到着する頃、中・大型の観光バスと次々とすれ違ったが、午前7時半ごろ、たった5分間ですれ違った観光バスの数は27台あり、いかに大きな観光地かがうかがわれた。しかし、観光開発の手は緩められてはおらず、普会寺の門前通りは整備途上であった（写真6）。ホンゴル・オボは現在柵に囲われたテーマパークの中にある。ホンゴル・オボは観光用に新設されたオボではなく、当該地で観光業を営む人々や普会寺の僧たちはホンゴル・オボを“兵士のオボ”だと説明していた。このオボがいつ建てられたかについては、100年くらいたっているということは一致しているものの、人によって若干説明が異なっている¹⁸⁾。いずれにせよ、ホンゴル・オボは寺の僧であるSG氏からの聞き取りやその他の文献からみると、この普会寺が管轄するオボではなかったらしいことだけは確かなようである¹⁹⁾。SG氏によると、寺が管轄しているオボは、アルビン・オボ、エルデニ・オボだという。ホンゴル・オボの起源についてはさらなる調査が要されよう²⁰⁾。

ところで、ホンゴル・オボがあるテーマパークに入る入場券は120元であり、前述の普会寺の入場料が20元であることと比べると、かなり高額といえる²¹⁾。ただし、これは場内でやっているパフォーマンス代が含まれている（写真7）。筆者たちが入場したときには、オボのパフォーマンスは終わりかけであったが、ざっと20数人くらいのパフォーマーはいたと思われる。少し見ただけでも明らかにシャーマニズムを意識した演出で、シャーマンが踊り狂い、兵士たちがオボに参拝して出発していくところを演じたものであった。内容は漢語で説明されていたのですべてはわからなかったものの、このオボが「兵士のオボ」であったということを聞いていたので、パフォーマンスの内容はこの「伝統」を踏まえていることが推測された。このパフォーマンスは、午前1回、午後2回上演されているとのことであった。場内は混んでいるとは言えないが、それなりに観

光客が入っている模様であった。見たところ漢族であった。近辺で観光ゲルを営むM氏（漢族）の夫人（モンゴル族）やSH氏（モンゴル族女性、60歳）によると、南方地域の漢族が来るという。S教授によると、モンゴル族はシラムレンにはほとんど関心はなく、もしそこに行くことがあるとすれば、モンゴル族以外の人を連れていくのであって、モンゴル族だけで出かけるのであれば、シリングル地方かフルンボイル地方に行くという。モンゴル族にとってフフホト近郊の観光地はまだ“見るべき対象”とはなっていないことがうかがわれる。SH氏は、最近の習近平政権の腐敗撲滅運動の影響により、以前より政府の幹部たちがこなくなってしまうと話していた。政府の幹部たちは、現在では個人的にやって来て、食事をしただけで立ち去るのだという。

近年、この地域一帯は放牧禁止になっており、2011年から年間牧民一人当たりはその補償金として5千元（約10万円）が支払われているとのことである。妻と子供と3人暮らしの、SH氏の息子D氏は、この草原費が3人分で年間1万5千元（約30万円）になるが、その保証金では食べてはいけなとこぼしていた。D氏は現在、第2ブリガードで妻方の親と暮らしており、羊100頭、牛30頭、馬10頭を飼っているとのことである。馬は、観光業に委託すると中間マージンを取られて収入にならないので観光客用に飼っており、一回に50元-100元（約1,000-2,000円）で観光客に乗らせるのだと話していた。内蒙古新報に勤めていたSH氏の母方のオジ（70代前半のフフホト在住の男性）から後に聞いた話によると、年間5千元の牧民手当では2012年から始まったそうであるが、その前年の2011年から草原費（草原が使えないための補償）として、一人当たり5千元以外にも、1畝あたり6元が支払われており、土地に対する補償も同時にあるらしい²²⁾。

副旗長のT氏やSH氏によると、このオボの土地は14軒の家がひとつの単位となって年3-4万元（約60-80万円）で企業に貸与しているという²³⁾。SH氏宅は2013年に契約し14年間の契約を結んだという。14年間というのは、この地域の土地の区分けが1983年に行われたが、その後1997年に延長され、次の更新は2027年におこなわれるとのことにな



写真7 シラムレン観光地に入る前の道路上にあったオボ祭祀パフォーマンスの広告（2015年8月、筆者撮影）。

っているからだという²⁴⁾。つまり、2013年から次の更新年である2027年までの年月が14年間ということである。土地を貸すようになった理由を尋ねたところ、ホンゴル・オボ一帯が放牧禁止地区となっているので、他にどうしようもないとの答えであった²⁵⁾。副旗長のT氏によると、この地域の人々は放牧禁止により、90パーセントが牧民ではなく商人になってしまっているという。前述の寺の僧たちも同じことを言っていたので、この見方は一般的なものならしい。T氏によると、シラムレンの郡（ソム）にはモンゴル族が2,400人ほどで、ソム（郡）の外に住んでいるのも合わせ960世帯あるという。観光客は年間100万人ほどで、ホンゴル・オボには30万人が来ているとのことである。これは前年度ベースの数字であるが、統計を取り始めたのが去年は遅かったため、2015年度はもう少し多くなるだろうとT氏は予想していた。SH氏のお宅は、夏は観光業で暮らしているが、10月に入ると観光客はほぼいなくなるので、それ以降は、フフホトとシラムレンの途中にある武川に家があるので、そこで暮らすのだという。

SH氏の家は、1997年からホンゴル・オボを祀っているということである²⁶⁾。毎年、陰暦の5月13日には入場券の必要なしにオボを祀れる権利をもらっているという。祀るとはいても、各自で僧を呼んで読経をしてもらう家もあれば、単に乳製品をもってお参りする程度の家もあるというように、その祀り方は各戸でまちまちである。土地を貸与している世帯がまとまってラマ僧を招聘して読経してもらったりすることはないということであった。SH氏によると、ここ2年はラマ僧を呼んでいないと言っていたが、普会寺のSG僧によると、SH宅はラマ僧を呼んで読経させる家のひとつだという認識であった。こうした聞き取りの中で出てきた事柄として重要だと思われたのが、かつては当オボを祀っていたが、オボが観光化されたことで信仰をやめたという世帯があったということである。すなわち、SG僧によると、かつてホンゴル・オボを祀っていたが、観光化されたため、ホンゴル・オボを祀るのをやめて、ホンゴル・オボの東南方向にある別のオボを復元した3-4軒の家があるというのである²⁷⁾。つまり、土地の請負制と観光化によって、オボの周辺住民だけに、信仰が補償され、且つ、利益も分配されているが—その分配額の妥当性はともかくとして—、周辺住民でなかった人は、オボが観光用の柵で囲われたため、事実上、閉め出されたということになる。

興味深いのは、次のようなことである。それは、SH氏やT氏によれば、陰暦の5月13日には民間でホンゴル・オボを祀るが、陰暦の5月18日には行政的に祭祀を執り行うということで、ホンゴル・オボの祭祀日は2つあるということである。行政が指揮をとる5月18日には、フフホトからもラマ僧が招聘され、盛大なものとなるという。そのさいには、モンゴルの民族祭典であるナーダムも行われ、近隣からも大勢の人々が集うという。5月18日が祭祀日になったのは、フフホトの大召のジャムソ・ゲゲーンが決めたことによっているという。ホンゴル・オボは第3ブリガードに位置しているオボであるが、副旗長のT氏によると、1997年以降、ホンゴル・オボは5つのブリガードのオボと



写真8 準備中の野外展示ゲル(2015年8月, 筆者撮影)。写真9 中でモンゴル模様を描き入れる職人(2015年8月, 筆者撮影)。

いう位置づけになっているという²⁸⁾。つまり、観光化による土地の囲い込みによって、オボ祭祀から締め出された人々が集まれるオボ祭祀を、行政側が新たに作り出した、ともいえる。

しかし、行政側が主体となっておこなうオボ祭祀は行事的なもので、土地をリースしている人々の信仰とも相容れないのであろう。祭祀の日をふたつに分けているのは、オボ周辺住民の信仰を保障するという意味があるように思われる。つまり、5月18日の行政主導の祭祀のほうは「観光化」の動きに対応しているのに対し、5月13日の民間の祭祀のほうは「非観光化」されたオボ祭祀の姿なのである。

筆者が訪問したさいには、テーマパーク内には真新しい6つの天幕が建設中で、T氏によると、ひとつひとつのゲルにテーマ性をもたせてモンゴルの「伝統的」生活文化を展示しようとしているのだという(写真8)。この一連の野外博物館は2015年度中には完成するが、観光シーズンには間に合わないので、翌年に開館される手はずになっているとのことである。中に入ってみると、職人がモンゴル机にモンゴルの「伝統的」模様を描き入れている最中であった(写真9)。このように、シラムレンの観光地は、普会寺付近も含めて、さらなる観光地化への道をたどっていることが窺われた。

2.2 シリングル盟シリン浩特市内のエルデニ・オボ

シリングル地方は上記のシラムレンとは対照的に、モンゴル族がモンゴル族／モンゴル人を連れていくことを好む場所であり、また「モンゴル性」を味わいたい外国人の訪れる場所のひとつである。エルデニ・オボは、シリン浩特市内にある著名なオボである(写真10)²⁹⁾。シリン浩特市はフフ浩特からシリン浩特まで車で650kmのところにある³⁰⁾。エルデニ・オボは、貝子廟(モンゴル語でビーシーン・スム、正式にはバンディタ・ゲゲン・スム)の後ろの小高い岡にあるが³¹⁾、現地の人々によると、エルデニ・オボは1966年の夏に破壊され、2004年に復元されたとのことである。S教授(50代半ば)は子供の頃シリン浩特市の貝子廟の近所に住んでいて、文革中、6歳か7歳ころに、エルデニ・オボが破壊されて、寺の前では山と積まれた経典が火に燃やされるのを実際に目撃



写真10 2004年に復興・新築されたエルデニ・オボ（2015年8月S教授の提供による）。

したという。エルデニ・オボは中心に大きなオボを配置し、両側にそれぞれ6つの小オボを整列させた13個から構成されるオボである。このオボについては日本でも多くの研究がある。貝子廟の門前町には土産物屋が軒を並べ、その活況を呈している。エルデニ・オボは貝子廟の脇からの通りをとおって、階段を登っていった小高い場所にある。現在は、オボを含む一帯はエルデニ・オボ公園として整備されており、筆者たちが訪れた頃が夕方だったせいもあるが、いかにも観光客然とした人々と同様に、散策を楽しむ多くの市民の姿があった。

S教授によると、こういう場所がシリント市内にほとんどないので、観光地を兼ねた市民の憩いの場所になっているのだという（写真11、12）。公園の中には碑が建てられていて、そこには公園として整備されたのは1985年だと書かれていた。この公園はすでに整備されている観はあるが、観光化はさらに進められていくかもしれないと感じられた。というのは、公園内に白い塔が立っていたが、S教授によると、以前に来たときにはなかったとのことである（写真13）。また、モンゴル文様風のゴミ箱も設置されていた（写真14）。

地元の人によれば、文革時代には、破壊されたエルデニ・オボの代わりに、バートルーディーン・フシュー（英雄記念碑）が立っていたという。その記念碑は、エルデニ・



写真11 右手奥に見えるオボに向かう人々（2015年8月、筆者撮影）。



写真12 オボの場所から降りてきた人々で左の建築物は貝子廟（2015年8月、筆者撮影）。



写真13 新しく建ったと思われる白い塔頭（2015年8月，筆者撮影）。



写真14 モンゴル風の模様をあしらったゴミ箱と吸殻入れ（2015年8月，筆者撮影）。

オボが2004年に復元された際に、移動され、一時は人民公園にあったらしいが、現在は市内にある烈士陵园に置かれているという情報を得たので、筆者たちはその烈士陵园を訪れた（写真15）。記念碑にはウランフーがつけたという題「革命烈士永遠不朽」とその蒙古語対応訳（bayaturčud ünide balarasi-ügei）が彫られていた（写真16）。1979年9月と刻まれており、厳密には文革時ではなく、文革後であることがわかる。とはいえ、筆者の見たものは1979年のものではなく、実際には新築したものであるらしい。なぜならば、HP上で見た同碑は明らかに異なる形状だからである（写真17）。それゆえ、この1979年に建てられた碑の消息は調査の必要がある。同HPによれば、この英雄碑はエルデネ・



写真15



写真16



写真17 2015年8月に筆者が撮影した烈士陵园の入り口に建てられた表札（左上写真15）と烈士記念碑（右上写真16）と2000年7月に撮影されたという13オボ跡地の英雄記念碑（左下写真17，<http://www.geocities.jp/7>，2016年12月27日閲覧）。



写真18 貝子廟の境内の堂宇のひとつ（2015年8月、筆者撮影）。



写真19 経を背負って貝子廟の白い塔頭を巡る女性（2015年8月、筆者撮影）。

オボの復興の兆しに対抗して建てられたものだと説明されていた。

貝子廟は清代には阿巴哈納爾左旗の旗廟であったため、旗はこの寺の名前でもって“貝子旗”とも呼ばれていた〔喬吉（編）1994: 84-85〕（写真18, 19）。現在は、博物館（廟の建物の一角）も閉鎖されているようであり、今回は内部を視察できなかった。今回の調査で知りえたことは、寺に附設されている蒙医院において、貝子廟のDマーム（モンゴル族、男性、84歳）がこの施設で施療をしており、蒙医院が地域医療のひとつを担っていることであった。じっさい、漢族も含め大勢の人々が詰め掛けていた姿を目の当たりにした。蒙医であるDマームによると、8歳のときに弟子にはいったとのことである。前日に聞き取りをしたシリnhotoの国際旅行社のBO社長によると、エルデニ・オボは文革で破壊されたが、文革時には5月7日に祭祀されるツァガン・オボというのがある、そのオボがエルデニ・オボに代替していたという話を聞いていたので、Dマームに尋ねたところ、そのオボの名前はバヤン・ツァガン・オボであって、貝子廟から西北に90km行ったところにあるという。祭祀日は確かに5月7日ではあるが、ゲゲンが自身で祀っていたという。Dマームに昔からラマたちが招聘されて祀っていたオボを聞いてみると、ハマル・オスニー・オボ、フルンティー・オボ、バドラフ・オスニー・オボ（これは観光客用のものであるがボム・ダラハといういわゆる土鎮儀礼を経たものだという）、エルスティー・オボ等々他にもたくさんあるということである。また、近年に新しく建てたオボの名前を聞いてみると、東北方角のバヤンボラク村のガジョール・オボ、オロヒー・オボ（これもバヤンボラク村にあるという）等があるという。1990年代に建てられたとのことである。マームの話から、復元されるものもあり、新しく建てられるものもありというオボの事情であった。

2.3 シリnhoto盟阿巴嘎旗の楊都廟の近くにあるアルタン・オボ（楊都オボ）

楊都オボは、シリnhotoの南南西方角にある（写真20）。この場所の旧名はバヤンゴルであったが、今はホンゴルゴル（洪格爾高勒鎮）という名前になっているという³²⁾。すぐ近くに楊都廟がある。楊都廟は清の同治三年（1864）に創建されたという〔那木吉



写真20 アルタン・オボ (楊都オボ) (2015年8月, 筆者撮影)。



写真21 オボにお参りした痕跡のあるハダクと牛乳袋の残滓 (2015年8月, 筆者撮影)。

(編) 2001: 707]。清代にはシリング盟の五部十旗の仏教徒たちの集まる聖地のひとつであったというが、現在はその面影はまったくない。文革後、廟そのものは1980年に宗教活動が再開され、1988年に盟公署や旗政府が修繕費用を工面し1991年に修繕が終了し、その年にソム (現在は鎮) 内ではあるが盛大な祝賀会が催されたという (同頁)。このオボは、S教授の知り合いの観光ゲルを営んでいるH氏宅から車で2、3分もかからないところに立地している。H氏からの聞き取りによると、観光客はこのオボにはほとんど立ち寄らないということである。このあたりは放牧地区ではなく、H氏宅は夏の間観光業を営むのであって、その他の季節は牧民として生活している。

とはいえ、筆者たちがこのオボを訪れたさいには、オボにハダク (絹布) と空になった牛乳袋が残されてあったので、お参りしている人がいることがうかがわれた (写真21)。H氏によると、オボはできてから100年以上経っているのではないかということ、旗のオボであるという³³⁾。地元の人にはアルタン・オボと呼ばれている。毎年陰暦の5月25日に祭祀をおこなっているという。そのさいには、土地の人たちだけでなく、旗の人々がこぞってやって来るとのことである。このオボは観光化されていないが、この付近にある泉が囲い込まれて公園になっている。入り口にはチケット売り場があり、大人は25元 (約500円) であり、駐車は車種によって料金の差があった。観光バスは一台単位でなく、一人あたり10元とある (写真22)。S教授によると、昔はその泉のところに自由に出入りできたという。S教授は泉が私有化されるということに対して驚いていたが、氏がチケット売り場の人に聞いたところ、地元の間人である場合には料金を支払わずに入れるとのことである。たしかに、筆者はS教授とその弟子と3人であったが、S教授分だけ引かれた50元で入ることができた。地元の間人-あくまでも当人が申告する必要はあるが—には柔軟に対応しているらしいことが窺われた。夕方であったので、観光客の姿はほとんどなかったが、公園の小道も舗装されており、道の脇には花なども整然と植えられていて、かなり整備されている様子であった (写真23)。公園の中にはオボもあったが、S教授によると、祭祀されているオボではないとのことであった (写真24)。泉の水



写真22 泉のある公園のチケット売り場（2015年8月、筆者撮影）。



写真23 整備された公園の中の様子（2015年8月、筆者撮影）。



写真24 公園内にあるオボ（2015年8月、筆者撮影）。



写真25 公園内にある泉（2015年8月、筆者撮影）。

量はたいして多くなさそうであったが、昔はもっと水があったとS教授は言う（写真25）。

アルタン・オボの近くにある楊都廟に寄ってみたが、ラマ僧はいなかった（写真26, 27）。そばにいた地元の人によると、寺には4-5人の僧がいるが、法会などがあるときに来るのであって、常住しているわけではないとのことである。

むしろ、僧がないのであるから、寺も観光化されてはいない。現在の楊都廟の状況、泉の観光化、オボが観光化されていないこと（非観光化）はおそらく関連しており、オボと泉という2つの信仰対象のうち、泉が観光資源として選ばれた結果、オボのほうは観光化されなかったのではないかと推測される。

アバガ旗政府のHPを最近見たところ、アバガ旗の行政サイドは、楊都廟と泉のふたつとともに観光名所として扱っていた。HPによると、この泉は、チャガン・ボラクという名前で、ホンゴル・ゴル鎮から東1 kmにあり、チンギスの馬が前脚の蹄で地面を引っ掻いたときに水が噴き出したという伝承が掲載されていた。そして、この泉の水を飲めば豊富な鉱物質で胃腸を丈夫にし、顔色を良くし、長寿になるとも解説されていた。そのほか、泉のそばで大きな声を出すと、泉の噴出がより高くなり、より激しくなると書かれている。たしかに、泉のそばで大きな声を出すと泉の水が反応するという点についてはS教授がこの泉を訪れたさいに話していた事柄であった。ここでは、オボ自体が「観光化」と「反／非観光化」という方向に分かれているわけではないが、明らかに泉が

観光化され、オボは観光化からはずれているという点で、観光化されるものとそうではないものに分化しているように見える。

これに関して、もう一つ考慮に入れるべきことがあるように思われる。それは、この地がシリント市の近郊であるということである。筆者が泊まったH氏(牧民)の観光ゲルには、食事だけをしに来る人々もいるということである(シラムレンでも同様であった)。実際、この観光ゲルにタクシーでシリントから乗り付けた漢族の若者たちがバーベキューをしに来て、いつの間にかタクシーで帰っていた(写真28)。この地がシリント市からタクシーでこれる範囲の距離であることは、大きな意味をもっているように思われる。なぜなら、前述したように、シリント市には、エルデニ・オボという観光化されたオボがあり、そこは市民の憩いの場になっているからである。つまり、オボに関して言えば、シリント市に見ごたえのあるオボがすでにあるので、わざわざこの地におけるアルタン・オボを観光化する必要はなかったと推測されるのである。ただし、泉の観光化については聞き取りができていないので、さらなる調査が必要である。

それ以外にも、実は、後から知ったことであるが、アバガ旗には、「チンギス・ボグド・オーラ」のオボや、グンジャブ・オボなど、“知名敖包”リストに入ったオボもあり、この二つのオボは観光化されている。ただし、「チンギス・ボグド・オーラ」のオボの成立の背景には、行政側と民間のモンゴル族の間で攻防があったことを達古拉氏が論じて



写真26 楊都廟 (2015年8月, 筆者撮影)。



写真27 アルタン・オボからみた楊都廟 (2015年8月, 筆者撮影)。



写真28 バーベキューをする人々 (2015年8月, 筆者撮影)。

おり [達古拉 2014: 87-102], またグンジャブ・オボについてもすんなり観光化されたわけではなさそうなので、それらのオボも枠組みに入れて考察する必要があるように思われる。それ以外にも、アバガ旗はチンギス・カンの異母弟ベルグテイの後裔たちの本拠地であったこともあり、近年、ベルグテイに関わる祭祀も創設されているので、これも含めた全体像を眺める必要があるだろう。

ところで、バーベキューは客の希望に応えたものなのであろう。なぜなら、観光ゲルに泊まった人には、モンゴル食を出しているからである。しかし、このモンゴル食さえも、夕食にはマヨネーズ風味のリンゴサラダが添えられていたり、朝食にも茹で卵やトマトとキュウリとハムの洋風のサラダが出て、モンゴル料理のみが出されているわけではない (写真29)。H氏の観光ゲルにおいては、プレハブの小屋に馬具や小型のアーチェリー、それに簡易ボートが保管されていた (写真30)。ボートはモンゴルの民俗文化のなかにはないものである。ちなみに、H氏によると、近くの河で水遊びをするためのものだという。しかし、こうした取り組みはあくまでも限定的なもので、全体としては「古さ」を見せようとしているように思われる。それは、宿泊用の観光ゲルの中においてある調度品である (写真31)。興味深いのは、古い調度品はやや不衛生にも感じられるのを払拭するかのように、ゲルのレストランにおいては、真新しい椅子とテーブルが用いられていた (写真32)。レストランにおいてはチンギス・カンの肖像がかったのだが、これ



写真29 (左) H氏の観光ゲルの食事 (夕食) (右) 朝食 (2015年8月, 筆者撮影)。



写真30 小屋に保管されている馬具と遊具 (2015年8月, 筆者撮影)。

はとくに「エスニック」を主張するものではないようで、前述のシラムレンにおけるSH氏宅の観光ゲルにも似通ったチンギス・カンの肖像がかかっていた。いずれにせよ、民俗文化と現代的な趣向の絶妙な取り合わせが観光ゲルの経営に欠かせないらしいことが窺えた。

ちなみに、この観光ゲルで出るビール瓶などの資源ごみは、オートバイを改造した特別回収車を使って、アルタン・オボの近くにあるゴミ集積所に運ぶとのことである(写真33)。

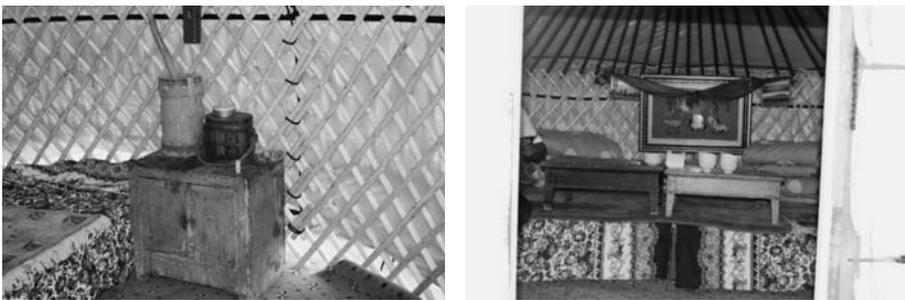


写真31 (左) H氏の宿泊ゲルの調度品(右)ゲルの入口からみた宿泊ゲルの様子(2015年8月,筆者撮影)。



写真32 (左) 観光ゲルのレストラン(右) H氏の観光ゲルの外観(2015年8月,筆者撮影)。



写真33 資源ゴミ回収車(2015年8月,筆者撮影)。

3 小括

本稿では、3つのオボ1) ホンゴル・オボ, 2) エルデニ・オボ, 3) アルタン・オボ(楊都オボ)についての視察状況を述べた。以下は「観光化」と「反/非観光化」という観点から整理し、今後の調査・研究の具としたい。

3.1 シラムレン地方のホンゴル・オボについて

土地の経営権をもっていない人々は、ホンゴル・オボの祭祀を断念し、別のオボを祭祀しているという点で、

空間的に、

ホンゴル・オボ祭祀 = 「観光化」

ホンゴル・オボ信仰をやめて別のオボを祭祀 = 「反観光化」

といえる。ただし、ホンゴル・オボ祭祀も実は二分化している。すわわち、

時間的に、

5月13日にはホンゴル・オボの土地の経営権をもっている人々の祭祀日

= 「非観光化」

5月18日はその地域全体のオボ祭祀日 = 「観光化」

となっており、「観光化」と「非観光化」の方向に分かれている。いずれにせよ、ホンゴル・オボに関しては、一方で「観光化」の動きがあり、他方に「反/非観光化」があるということになる。

3.2 シリンホト市のエルデニ・オボについて

エルデニ・オボは観光化されているが、ここにおいては、「観光化」プロセスにおいて1)のような「反/非観光化」の動きがあったのかどうかについての現地の人々からの聞き取り調査はできなかった。ただ、1)のホンゴル・オボや2)の泉とは異なり、エルデニ・オボに関して言えば、拝観料を取っていないので、オボ自体に大きな経済効果はないように思われる。また、エルデニ・オボの場合、オボの再建前に立っていた烈士の碑の存在が確認された。現在の烈士陵园にある碑には前述のように不明の部分もあるが、烈士の碑が結果的に「反/非観光化」されていることが窺われる。

3.3 シリングル地方のアバガ旗のアルタン・オボ(楊都オボ)について

楊都廟の近くにあるアルタン・オボは観光されてはいない一方で、楊都廟の近くにある泉は観光されている。これは、

泉 = 「観光化」

アルタン・オボ (楊都オボ) = 「非観光化」

といえるのではないかと推測した。オボについては、道路事情がよくなった現在、シリンホト市のエルデニ・オボがあるために、アルタン・オボをあえて「観光化」させなくてもよい条件にあるからである。とはいえ、アバガ旗には別に二つのオボがあり、それらは観光名所になっているので、それら二つのオボも考察に入れて今後論じる必要があるとともに、近年“観光資源”として開発されているベルグテイに関わる祭祀もまた視野に入れなければならないであろう。

注

- 1) オボ—日本語では「オボー」と長音で表記することも多いが本稿では「オボ」と表記する。
- 2) たとえば、清朝時代において形成された盟旗制度のもとで旗と旗の間の境界上に印付けられたオボは基本的に祭祀や信仰の対象にはなっていない。達古拉氏は日本人研究者の初期の研究では清代に旗と旗の境界に設けられた“標オボ”を“祭祀オボ”とを厳密に区別していなかった点を指摘している (達古拉 2014: 12-13)。本稿で扱うのはすべて“祭祀オボ”である。
- 3) この論としては、後藤 [1956]、Atwood [2004] がある。とくに漢族の農耕化による牧地の縮小というモンゴル族牧民の立たされている苦境は生業の違いを基にする民族紛争という描き方もできるかもしれないが、モンゴル族も状況によっては農耕に従事する人もいるので、紛争の形態としては、土地紛争という色合いが濃いように思われる。そのように考える場合、後藤が描き出した land-owner worship (後藤は日本語で「土地の神」と書いている) としてのシャーマニズムとは系統を異にするオボ信仰という捉え方は全く無効とは思われない。ただ、サインチョクト氏のアルホルチン旗における現地調査による情報も多く含まれている論考 [2007] には、馬に乗った人間を生き埋めにしたというような埋葬塚由来のオボ伝説が数件紹介されていて、実際に起こった出来事なのか象徴的な言説なのかはともかく、人間の命を犠牲にする発想そのものに仏教的要素が感じられないので、さらなる考察が必要であろう [サインチョクト 2007: 12-13]。とはいえ、アルホルチン旗におけるモンゴル族と満洲族のオボの形状に関する差異について、氏はその背景を「土地をめぐる、満洲・モンゴル族の争い」と語っていることは興味深い [サインチョクト 2007: 13]。
- 4) 本稿では、「モンゴル族」という表現は、筆者には語感としてやや違和感があるが、マジョリティ民族も“漢族”と表記しているので、中国国籍のモンゴル人を“モンゴル族”と表記する。これに対して、モンゴル国籍の人々を“モンゴル人”と表記している。
- 5) 辻雄二氏や武藤康弘氏が指摘するように、日本人研究者によるオボに関する調査研究は「満州建国」とおおきくかかわっており、その蓄積された成果は今も学術的価値をもつと考えられる [辻 1994: 136; 武藤 2011: 85]。
- 6) 内蒙古におけるオボ関連の論文は日本に留学していたモンゴル族研究者によって博士論文として既に4本が提出されていることにも表れている。この4本を古い順に列挙すると、烏日図那蘇図氏の「オボ—祭祀：ウジムチン地域の祭祀文化に関する文化人類学的研究」(2007年、千葉大学)、那仁畢力格氏の「モンゴル族のオボ—祭祀：内モンゴル・オトク前旗の事例にみる帰属意識・グローバリゼーション」(2010年、神奈川大学)、白莉莉氏の「モンゴル族のオボ—

信仰の持続と変遷：内モンゴルオトク地域の事例を中心に」(2013年, 神奈川大学), 達古拉氏の「モンゴル人のオボー祭祀のポリティックスとその役割：内モンゴルの中部における行政オボーを事例に」(2014年, 奈良女子大学)である。ここでは触れないが, 博士論文以外にもモンゴル族研究者によるオボ関連論文は多数ある。このなかでも, たとえば, 楊海英氏の論考[2003]は重要な論点をいくつか含んでおり, 注目される。ただし, 資源化という観点からみると, 当論文で考察対象になっているオボは, 観光化という方向性で資源化されているわけではないので, 本稿における観点とは異なっている。

- 7) この記事については次の URL を参照。http://www.newsqq.com/a/tsyq/2016/0624/7124.html(2016年12月12日閲覧)
- 8) 呼和敖包という名称は新しいものであるらしく, U氏によると, 以前は“テンゲル・オボ”と言っていたという。
- 9) 呼和敖包は現地でU氏がきいたところ創立は2006年らしい。
- 10) 日本人研究者で文化革命後いち早くオボの復興状況を紹介したのは, 烏日図那蘇図氏も指摘しているが[オルトナスト 2007: 40; 44], 大塚和義氏のフフホト市から北へ約180kmのところにあるウランチャブ草原のバイエンフシヨ生産大隊におけるフィールド調査であろう[大塚 1984]。ここで大塚氏は復活したばかりのオボ祭祀とその後のナーダムに立ち会って豊富な写真資料を紹介しており, 当時の様子が活写されている。
- 11) 吉田順一氏によれば, 農耕化の進む東部地域においては, 文化大革命後も, オボの復活は鈍かったことが指摘されている[吉田 2006: 268]。
- 12) 大塚氏によれば, 「バイエンフシヨの生産大隊では, 今年の早魃がひどく, 『雨が降ってください。草が長くのびてください。家畜はみんな肥えるように』と祈願するため, オボ祭りの開催を牧民たちが関係機関に要望した結果, 実現したものと言う。また, 往時ほどではないにせよ, 比較的大がかりに, 今回近年ではめずらしい規模で開催されたのも, オボ祭りの観光化をねらって, 試験的に生産大隊以外の人々にも参観させたということに耳にした」という[大塚 1984: 22]。なお, この調査は, ナランビリゲ氏によると, 1984年6月20日に行われたものだという[ナランビリゲ 2005: 180]。
- 13) ただし, 時に積極的に女性の参加するオボ祭祀もある。たとえば, 『蒙古学百科全书・宗教卷』では, オボ祭祀に関わる禁忌について, 「祭祀を伴うオボのなかには女性がそこに行ってはならないというオボがあるが, 女性の子宮を敬う考え方から, フフノール(青海省)のパヤン・ツァガン・オボ(豊かな白いオボ)を祀っている」と記されている[蒙古学百科全书編輯委員会 2007: 99-100]。
- 14) その背景には, オボ祭祀に関わっていたラマ僧たちや地域の老人たちの数が少なくなったことが理由に挙げられている[Urtunasutu 2012: 680]。
- 15) すでに吉田氏も同じ趣旨のことを指摘している[吉田 2006: 276]。
- 16) 清朝康熙三十五年(1696年)に清軍がガルダン・ボシヨクトに征西するときに, トゥメト右翼旗の都統に1つのソムの兵士を派遣するように命じたことに始まるという[徐・孟克徳力格爾 2012: 195]。
- 17) 外事辦公室に1980年に日本語通訳として入り, 外事辦公室所属の国際旅行社フフホト支部で勤務していたBT氏(ダグル族男性, 63歳)によると, シラムレンというのは1980年には政府関係者が接待する場所として最初に開拓されたところで, その次に開拓されたのがオランチャブ盟の四子王旗王府二隊(人民公社)であるが, 後者の場所は現在もあるが観光はやっていないとのことである。これに代わって出てきたのが手前のゲゲンタラだという。

- 18) シラムレンの普会寺の僧 SG 氏 (モンゴル族男性, 50歳) によると, ホンゴル・オボは100年ほど経っており, これが「兵士のオボ」と言われている理由は, 旗の中心である百霊廟まで漢族商人たちを送り届ける「防商団」に拠っているとのことである。また, 当時, 治安が悪化したさいに人々を守るために出かけるときにオボにおまいりしていた人々だと言う。この「防商団」説を否定するのがシラムレン出身の内蒙古新報にかつて勤務していた L 氏 (モンゴル族男性, 70代前半) である。L 氏によると, 10歳くらいまでの頃に自分の母親が言っていたことを記憶していて, ホンゴル・オボは1920年代の民国時代に遡るものだと聞いたとのことである。当時, 鑄鉄製の大きな刀がオボの上に突き刺さっていたという。つまり, 兵士のオボというのは, 当地を守るために組織された自警団がその任務に付くときに参拝していた場所らしいということである。L 氏の祖父や普会寺で聞き取りをした D 氏 (モンゴル族男性, 80歳) の父も団長をしていたことがあるという。
- 19) 普会寺の管轄していたオボとしてアルビン・オボとエルデニ・オボを含む7つのオボが挙げられているが, その中にホンゴル・オボが入っていない [徐・孟克徳力格爾 2012: 203-204]。
- 20) ホンゴル・オボと, 寺のオボ2つは, 前述の“知名敖包”リストには入っていない。ホンゴル・オボの属している包頭市でリスト入りしているのは3基で, 達茂明安聯合旗からは宝格達敖包と那日圖敖包, 石拐区からは吉布胡朗敖包である。
- 21) 1997年に普会寺を訪れた菅沼晃氏によると, 文革で1966年に破壊され, 1983年に再建された本殿がひとつのみあっただけで, 7, 8名の僧が毎朝勤行を行っているだけであったという。そして, かつての学問寺も今は保養地に来た人々が序に参詣する観光寺院になっていたという [菅沼 2002: 22]。
- 22) D 氏によると, この年5,000元が少なくとも当年度分が聞き取り当時まだ払われていないということであり, またその補償がそのうちになくなるかもしれないという噂もきいたとのことである。L 氏によると, 2015年からはこの6元が6.5元に値上げされるとのことであったが, 値上げが人に対する補償とどう関連しているのかを聞きそびれてしまった。
- 23) 副旗長の T 氏によると, リース代は年間4万であるが, 当の SH 氏の話では3万であった。なお, SH 氏によると3年間分が先払いされているという。また, T 氏によると, 14軒ということであったが, SH 氏の話では, 1軒は一度出てまた戻ってきたという。この意味の詳細は不明であるが, どうも契約はグループとしてではなく, 個々で行われているらしいことがうかがえる。なお, リースしている企業の取締役はモンゴル族で, 社長は漢族だという。
- 24) すなわち, 1997年から2027年までの30年間の土地所有権を与えられたということである。
- 25) 後で副旗長の T 氏に確認したところ, SH 氏宅は1996年から観光業を始めて2002年に牧畜をやめたとのことである。現在, 観光テントは22戸あるということである。
- 26) 以上の話を組み合わせると, SH 氏宅の土地は, 1997年に延長年であったので, 前年の1996年に観光業に入り, 30年間貸し出されることになったその土地のホンゴル・オボを1997年から祀りはじめた, ということになる。
- 27) T 氏によると, この3, 4軒のお宅も第3ブリガード所属であるというが, 聞き取りはできなかった。新しく祀りようになったオボはツャガーン・オボと言い, 新設されたものではなく, もともとあったオボを復元したものであるという。
- 28) 現在, シラムレン鎮は, 人民公社時代は5つのブリガードで構成されていたが, 現在は第1, 2ブリガードがフフデルフ・ガチャ, 第3ブリガードがハラ・オス・ガチャ, 第4, 5ブリガードがバヤンノール・ガチャと区画と名称が変わっているが, 人々の話では今でもブリガード名を用いることのほうが多い。T 氏は「5つのガチャのオボ」と言ったが, 実際には, 「5つの

ブリガードのオボ」を言ったものであろうと推察される。

- 29) 日本の多くの研究者がこのオボについて言及している〔長尾 1992 (1947): 94-95; 池内編 1997: 125-133〕等。池内編は、江上波夫氏の『蒙古高原横断旗』の「シリングル紀行」を独立させたものであるが、興味深いのは、江上氏は貝子廟でオボ祭祀を目撃しているが、それを弥勒の供養に変形したものであると指摘していることである〔池内編 1997: 132-133〕。
- 30) 筆者は、S教授の運転する車でフフホト→集寧（高速道路G7）→白音查幹（高速道路G55）→察哈尔右翼后旗→商都县→正镶白旗→桑根达赖→烏日図塔拉苏木→灰騰希勒→錫林浩特という経路で錫林浩特市内に入った。フフホトから錫林浩特市内まで高速が開通していた。途中、桑根达赖で一端降り食事休憩した後、烏日図というところで高速に再び入った。烏日図からは張家口に行く道と、錫林浩特に向かう道が分かれており、錫林浩特への高速道路は前年に開通したばかりだという。
- 31) 長尾雅人氏によると、貝子廟の西廟延福寺の創建は1721年で、1943年4月には僧数は868名おり、シリングル盟東阿巴哈納尔旗内にあり、いわゆる旗廟であったという〔長尾 1992 (1947): 93, 104〕。1997年に調査したときの菅沼晃氏の見聞によると、当時何とか復興されて昔日の面影をしのぶことができるのは、境内の東寄りにあるジュットパ・ドゴン（かつての密教学部の本堂、伽藍）だけで、十数名の僧がいて読経や法要を行っていたという〔菅沼 2002: 20-21〕。
- 32) 『阿巴哈旗志』によるとこのホンゴル・ゴルは洪格尔高勒苏木（現在は鎮）の人民政府の所在地となっているとのことである。ちなみに解放前は阿巴嘎左旗に属していた。
- 33) このオボも“知名敖包”リストには入っていない。

参考文献

〈日本語文献〉

池内紀編・解説

1997 『江上波夫の蒙古高原横断記』東京：五月書房。

大塚和義

1984 「中国・内モンゴル自治区モンゴル族のオボ祭りと牧畜」『えとのす』23: 1-25。

オルトナスト, ボルジギン（烏日図那蘇図）

2007 「オボー祭祀—ウジムチン地域の祭祀文化に関する文化人類学的研究」（千葉大学社会文化科学研究科学位論文）。

後藤富男

1956 「モンゴル族に於けるオボの崇拜—その文化に於ける諸機能」『民族学研究』19(1-2): 47-71。

サインチョクト

2007 「アルホルチン旗におけるモンゴル族と満州族のオボ—崇拜」『モンゴル研究』24: 10-19。

菅沼晃

2002 「シリンホトから百霊廟へ—貝子廟, 百霊廟, シラムレン・ジョウ（モンゴル仏教紀行8）」『春秋』11: 20-23。

達古拉

2014 「モンゴル人のオボー祭祀のポリティックスとその役割—内モンゴルの中部における行政オボーを事例に」（奈良女子大学博士論文）。

辻雄二

1994 「オボ—信仰再考—東アジア民間信仰理解における一試論」『史鏡』29: 136-152。

長尾雅人

1992 『蒙古学問寺』東京：中公新書（初版は1947年）。

ナランビリゲ（那仁畢力格）

2005 「モンゴル族のオボ—研究史」『比較民俗研究』20: 173-185。

2010 「モンゴル族のオボ—祭祀—内モンゴル・オトク前旗の事例にみる帰属意識・グローバリゼーション」(神奈川大学歴史民俗資料科学研究科学学位論文)。

白莉莉

2013 「モンゴル族のオボ—信仰の持続と変遷—内モンゴルオトク地域の事例を中心に」(神奈川大学歴史民俗資料科学研究科学学位論文)。

武藤康弘

2011 「1930年代から40年代に日本人が記録したモンゴル民族誌の悉皆調査」『奈良女子大学研究教育年報』8: 85-95。

楊海英

2003 「漢民族がまつるモンゴルの聖地」塚田誠之（編）『民族の移動と文化の動態—中国周縁地域の歴史と現在』pp. 293-341, 東京：風響社。

吉田順一

2006 「近現代内モンゴル東部地域の変容とオボ—」早稲田大学アジア地域文化エンハンシング研究センター（編）『アジア地域文化の構築：21世紀COEプログラム研究集成』pp. 255-282, 東京：雄山閣。

〈中国語文献〉

喬吉（編）

1994 『内蒙古寺庙』内蒙古历史文化叢書，林子（主編）呼和浩特：内蒙古人民出版社。

徐忠文・孟克德力格爾（編）

2012 『南遷部落』（達爾罕茂明安聯合旗歷史文化叢書）呼和浩特：内蒙古出版社。

那木吉（編）

2001 『阿巴嘎旗志』呼和浩特：内蒙古人民出版社。

〈モンゴル語文献〉

Urtunasutu (Borjigin N. Urtunasutu)

2012 Obuyan takilay-a soyul-un kümün jüi-yin sudulul, Öbör Mongyol-un yeke surγayuli-yin keblel-ün qoriy-a

蒙古学百科全書編輯委員会

2007 「ObuG-a」『蒙古学百科全書・宗教卷』pp. 92-9, 呼和浩特：内蒙古人民出版社。

Sarana

2016 『内蒙古社会科学』2016年第2期（蒙文版），裏内表紙。

〈英語文献〉

Atwood, Christoph P.

2004 Obo. *Encyclopedia of Mongolia and the Mongol Empire*, pp. 414-415. Bloomington: Indiana University.